

# 駄馬と百姓

小川未明

青空文庫



甲こうの百姓しやうは、一いびきの馬うまを持もつていました。この馬うまは脊せが低ひくく、足あしが太ふとくて、まことに見みたところは醜みにくい馬うまでありましたが、よく主人しゆじんのいうことを聞きいて、その手助てだすけもやりますし、どんな重おもい荷物にもつをつけた車くるまでも引ひき、また、あるときは脊せの上に荷物にもつを積つんで歩あるいたのであります。

他たの馬うまは、よく主人しゆじんの意いにさからつたということきを聞ききますけれど、この馬うまにかぎつて、けつして、そんなことはなく、汗あせを流ながしてよく働はたらきました。それがために、甲こうの百姓しやうは、どれだけ利益りえきを得えていたかわかりません。

「さあ、もうすこしだ。我慢がまんをして歩あるけよ。」と、主人しゆじんは疲つかれた馬うまに向むかつていいました。

馬うまは、うなだれて、黙だまつて重おもく車くるまを引ひいていました。また、あるときは、主人しゆじんは、「さあ、もう一つ先さきの茶屋ちややまでいったら休やすませてやるぞ。そして、おまえにも餌えを食たべさせてやる。」といいました。

馬うまは、その言葉ことばに力ちからを得えて、いつしようにけんめいで車くるまを引ひいてゆきました。そして、やがてその茶屋ちややに着つきますと、百姓しやうは、茶屋ちややの中なかへ入はいつて休やすみました。自分じぶんは茶ちやを飲のんだり、

お菓子を食べたりしましたけれど、外に疲れて、汗を流して立っている馬にはかまいませんでした。

百姓は、自分の疲れがなおると、また馬の手綱をとって引いてゆきました。彼は、先刻馬に向かつて約束をしたことなど、すっかり忘れていたのです。

馬は、心の中で、どう思ったかしらなければ、主人のいうがままにおとなしく働いていました。

「こんな醜い馬だけれど、こうして、よく働いているから、まあ飼っておくのだ。」と、甲の百姓は、自分にもそう思い、また、人に向かつて、そう語りました。

馬は、なんといわれても、下を向いて黙っていました。ある日のこと、甲は、その馬にたくさんの荷物を積んだ重い車を引かして町へゆきました。途中その馬を見た人々は、みんな驚いて、口々に、馬をかわいそうだといひ、また、よく働く、強い馬だといひてほめたのであります。

甲の百姓は、荷を下ろしてから、馬を引いて自分の村に帰ってきました。その途中、乙の百姓に出あったのです。

乙の百姓は、じつに脊の高いりっぱな馬を引いていました。見たところでは、どこへ出

しても恥はずかしくない馬うまでありました。その馬うまのかたわらへ甲こうの馬うまが並ならびますと、それは較くらべものにならないほど、姿すがたの上うえで優ゆう劣れつがありました。甲こうの百姓しやうは、内ない心しん恥はずかしくてしかたがありませんでした。

そのとき、乙おつの百姓しやうは、つくづくと甲こうの馬うまをながめていましたが、

「おまえさんの馬うまは、なかなかいい馬うまですね。」といいました。

甲こうの百姓しやうは、内ない心しん恥はずかしく思おもつていたところですから、こういわれましたので、顔かおの色いろが赤あかくなりました。

「いくら、おまえさんの馬うまがりっぱでも、そうばかにするものでありませんよ。」と、甲こうの百姓しやうはいいました。

すると、乙おつの百姓しやうは驚おどろいて、

「いえ、私わたしは、けつしてそんな意味いみでいったのでありません。平常ふだんから、あなたの馬うまを感かんしんしてしましたので、そういったのです。私わたしの馬うまが、なにいいことがありましよう。まつたく、私わたしの手てには、もてあましているのです。あなたさえよろしければ、いつでも換かえてさしあげますよ。」といいました。

甲こうの百姓しやうは「いつでも換かえてやる。」と、乙おつの百姓しやうがいましたので、はじめで、彼かれが、

ほんとうに自分の馬をほめていることがわかつたのであります。そして、なに、よく働くも、働かないも、使い方ひとつだ、と甲の百姓は思いました。自分の馬がいいのでない、俺が、うまく馬をだまして使うからだ。もし俺にこの乙の上等の馬を持たしたなら、この馬より幾倍よく馴らすかしのれない。だいいちりっぱな馬で、どこへ出しても恥ずかしくないだろうと考えました。

「それほど、おまえさんが私の馬が気に入つたのなら、いまでもいいから、換えてあげますよ。」と、甲の百姓はいいました。

こう聞くと、乙の百姓は、たいそう喜びました。

「それはありますがどうございます。私は、いままで、どれほど、この馬に悩まされたかしれません。まことにいうことを聞かない馬です。あなたはよく仕込んでください。」と、乙の百姓はいつて、自分のりっぱな馬を甲に渡し、甲の持つていた脊の低い醜い馬を受け取つて、いたわりながら、乙の百姓はあちらへ去つてしまいました。

甲の百姓は、乙のりっぱな脊の高い馬を連れて、我が家へ帰りました。その明るる日から、甲の百姓は、その馬に車を引かせて歩くことになりました。

すると、すこし荷が重いと、馬は首をふつてすこしも動きませんでした。甲の百姓は、

これは太い奴だと思つて、ピシピシと縄で馬の脊中をなぐりました。けれど、なぐればなぐるほど、馬はいうことを聞きませんでした。

「なに、俺が手なはずけたら、どうにでもなるだろう。」  
と、甲の百姓の思つたことは、まったくあてがはずれてしまいました。

それにつけ、いままでの馬は、醜かつたけれど、まことにすなおな、いい馬であつたといふことが、はじめてわかりました。

甲の百姓は、とうとう腹をたててしまいました。

そして、馬の手綱を無理に引っ張りました。

すると、あくまで剛情な馬は急に暴れ出して、甲の百姓をそこに蹴倒して、手綱を切つて、往來を駆け出したのでした。

村じゆうは、大騒ぎをしました。

その馬を取りしずめるやら、甲の百姓を介抱するやら、たいへんでしたが、その後甲の百姓は、いつまでもその馬のために弱らせられました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「駄馬《だば》と百一姓《ししょう》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 駄馬と百姓

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>